

# 現代から考える倫理

## —主体的・対話的で深い学びを実現するために—

大阪府立高等学校元教諭  
池田 徑

はじめに

数研出版『改訂版 倫理』の最大の特徴のひとつは、新たに「現代から考える倫理」のページが加えられたことである。これは、倫理の学びを従来の思想史中心の学習にとどめず、現代的な課題に応用して深めるために設けられたものである。「高等学校学習指導要領(平成30年告示)解説 公民編」p.87においても、「『倫理』の学習において主体的・対話的で深い学びを実現するためには、科目の学習において適切な課題を設定し、その課題の追究のための枠組みとなる多様な視点(概念や理論など)に着目して、課題を追究したり解決したりする活動が展開されるように学習を設計すること」が求められている。本教材は、その理念を具体化し、知識の理解と思考力・判断力・表現力の育成を目指すものとして置かれている。

### 1. 従来の倫理教育の課題と本教材の意義

従来の倫理の授業では、思想家の学説や概念を体系的に学ぶことが重視されてきた。しかしその一方で、生徒にとっては「覚えるべき内容」として受け止められやすく、それが現実の問題とどのように関わるのかが見えにくいという課題も指摘されてきた。本教材では、こうした課題を克服するために、「現実の問題から出発し、思想によって考えを深め、再び現実に立ち返る」という往還的な学習過程を重視している。すなわち、倫理の学びを単なる知識ではなく、現実を理解し判断するための「思考の道具」として活用する力を育てることを狙いとしている。

### 2. 現代的な課題から主体的な学習へ

本教材で扱う6つのテーマ——「ケアの倫理」「予防と個人の自由」「SNSと政治・経済」「多様性と分断」「コミュニティと共生」「核兵器と平和」——はいずれも、生徒の生活や将来に密接に関わる現代的な課題である。たとえば、感染症対策における行動制限や、SNSでの発信のあり方、あるいは多様

性をめぐる議論などは、現代社会を生きる生徒たち自身が日常的に接している問題である。このような身近な問題を入り口とすることで、生徒は学習内容を自分事として捉えやすくなり、現代的な課題について主体的に考える姿勢を育むことができる。

また、各テーマの内容について、単一の立場を提示するのではなく、複数の考え方を併置する構成にしている。たとえば、SNSの規制については、「完全な自由」を重視する立場と、「一定の規制」を必要とする立場の双方を提示している。多様性の問題においても、アイデンティティ・ポリティクスやアフーマティブ・アクションの意義を示すと同時に、それが分断やバックラッシュを生む可能性にも言及している。このように対立する視点を提示することで、生徒は単純な正解を求めるのではなく、複数の価値の間で思考し、自らの立場を形成する経験を積むことができる。

### 3. 思想と現代的な課題の往還的理解

本教材では、現代的な課題を考える上で参考となる思想家の学説や概念を詳しく紹介していることも重要である。これは、思想史の蓄積を踏まえてはじめて、現代的な課題に対する倫理的な見方や考え方が深まることを理解させるためである。意見の表明や発表など、アウトプットを重視するあまり、知識の理解や習得などのインプットが疎かになってはならない。十分なアウトプットを行うためには、十分なインプットが必要であり、アウトプットのを設けるのは、むしろインプットへの動機づけを高めるためであるといえる。思考力、判断力、表現力は、知識に裏打ちされてこそ発揮できるものである。そのことを念頭において、本教材では、現代的な課題と思想を往還させる構成となっている。

たとえば、「ケアの倫理」においては、ギリガンの議論を通じて従来の正義中心の倫理観を問い直し、人間関係や依存性に注目する新たな視点を提示している。また、「予防と個人の自由」では、ミルの他

者危害原則を基準として、どのような場合に自由の制限が正当化されるのかを考察させる。

このようにすることで、生徒が思想に関する知識を踏まえた上で、それを単なる知識にとどめず、現実の問題を考える際の指針として活用することができるようにしているのである。

#### 4. 探究学習を促すページ設計

各テーマの「論点」は、「～について」ではなく、すべて「問い」の形で提示されている。たとえば、「コミュニティと共生」の論点は、「観光客や移民の受容は、コミュニティの維持・活性化につながるだろうか?」となっている。そして各テーマの末尾は、「あなたの考えは?」として自分の考えを書かせた上で、「問いを立ててみよう」で締めくくられている。これは、探究的な学びを促す意図がある。

調べ学習は「問いから始まり答えで終わる」ものといえるが、探究学習は「問いから始まり問いで終わる」ものであると考える。探究学習は、課題の設定→情報の収集→整理分析→まとめ・発表というサイクルで構成されるが、まとめ・発表で終わりではなく、それが次の課題の設定へとつながっていく。課題の設定とは、問いを立てるということであり、問いが問いを生むのが探究学習だといえる。「現代から考える倫理」のページは、設計自体が、生徒に探究学習を促す形になっているのである。

余談になるが、私は普段の倫理の授業も「問いから始まり問いで終わる」ようにしている。例えば、ソクラテスについて学ぶ時には、かつては「古代ギリシア思想——ソクラテスについて」などとしていたが、現在では、「なぜソクラテスは死刑判決を自ら執行したのか?」というタイトルにして、授業の中で生徒とともにその問いを探究している。生徒には、授業プリントに探究の経過と結果を書き込んでもらった後、最後に問いを立てさせている。ある生徒は、「ソクラテスが命をかけて民主主義の重要性を訴えた後、アテネでは民主主義が守られたのか? 守られなかったとしたらそれはなぜなのか?」という問いを書いていた。これは現代の民主主義の問題にもつながる問いであると私は感じた。答えを覚える授業ではなく、問いが生まれる授業を展開したいと願って、このような実践を続けている。

#### 5. 授業における活用

授業での活用においては、各テーマの「問い」を個人で完結させるのではなく、対話的な活動と結びつけることが重要である。小グループで意見を共有させたり、全体で討論を行ったりすることで、生徒は自分とは異なる意見や価値観に触れることができる。その過程で、自らの考えを見直したり、より説得的に表現しようとしたりする姿勢が育まれる。特に倫理の学習では、他者の立場を理解し、尊重する態度を養うことが不可欠であり、本教材はそのための有効な素材となる。

加えて、本教材は「正解のない問い」に向き合う力を育てることになる。現代的な課題の多くは、自由と安全、平等と公平、個人と社会といった価値の対立を含んでおり、単純に正誤を判断することができない。本教材では、あえて複数の考え方を提示し、生徒が葛藤しながら思考を深めることを意図している。このような経験は、将来、社会の中で意思決定を行う際に不可欠な力となるであろう。

したがって、本教材は単なる補助教材としてではなく、各単元の中に位置づけて活用したい。たとえば、ハーバーマスの公共性論を踏まえてSNSの課題を検討したり、ロールズの正義論を学んだ後に核兵器の問題を考察したりするなどが考えられる。思想の理解と現代的な課題の考察を往還させることで、知識は生きて働くものとなり、生徒の中に定着する。それは、学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性等」を涵養することにもなる。

#### おわりに

現代社会は、多様な価値観が共存し、しばしば対立する複雑な状況にある。その中で求められるのは、自らの考えを持つと同時に、他者の立場を理解し、対話を通じてよりよい解決を模索する姿勢である。倫理の学びは、そのための基盤を形成するものである。本教材が、生徒一人ひとりにとって、自分の生き方や社会のあり方を主体的に考える契機となり、よりよい未来を切り拓く力を育む一助となることを期待している。

#### 【参考文献】

「高等学校学習指導要領(平成30年告示)解説 公民編」(文部科学省, 2019年)